

文化の中の教育 (三)

「よく観る」ということ

原 ひろ子



1 「よく観る」こと

また、こんなエピソードもあります。ある日、ヘヤー・インディアンの子と三歳の娘ルーシーが、私のテントと一緒に住むことになりました。はじめての食事のときは、私がぜんぶ準備をしました。その次の食事はメリーがしておくというので、私は別のテントにインタビューに出かけました。その仕事をすませて戻ってみると、兎のラード焼のにおいにおいがします。私がいつも一人でぞうしていたように、アルミニウム製の小型トランクを食卓にして、その上に塩、胡椒、スープ皿、スプーン、バノック（かたやきのホット・ケーキ風パン）の皿、バターがおいであります。これらのものが、さきほどの食事のときに、

私がおき並べたのとまったく同じ位置においてあるのです。スプーンをひとりひとり配らずに、きちんと三つ重ねておいたところまで寸分たがわず同じなのです。これには驚いてしまいました。メリーが、私のテントで食事をするのは、その日が初めてなのに、びたりと、鏡のように覚えこまれたのです。

一般に、ヘヤー・インディアンの人たちは、景色や、ものの形など、視覚にうったえるものを記憶する能力が高いように思われます。この資質は、たしかに、「自分でおぼえる」ためには、そして、特に狩猟採集のなりわいのためには、持ち合わせるに越したことはないものです。ところで、この能力は、「自分で覚えねばならない」必要性から、生理心理的におのずと個々人にそなわってくるものなので

しょうか？ それとも、この能力を体得するについて、まわりにいる人間が与える刺激（「教える」ことはしないまでも）がはずかかって大きな力を持っているのでしょうか？

「ハヤ社会があるものをよく観ているかどうかに関して批評したり、逸話の中でふれられたりする例には、私は接していません。ここでは、「よく観る」ことは当然であるかのようにあつかわれていると私は感じます。しかし、これは「遺伝」によるものでしょうか？

これらの問いに対して、私は回答を持ち合わせていません。ただ、現在の私の知識からすると、ハヤ・インディアンの「よく観る」能力は、その重要性が文化の体系の中に組み込まれていて、個人に、その能力の体得を要請しているものであると考えるのです。だから、二、三世代のちに、大きな生活様式の変化が起こった場合、彼らの中には、「よく観る」能力をもち合わせない個人が出てくる可能性があります。

さて、さらにエピソードを続けて紹介しましょう。

2 「おぼえる」場における人と人の交

流ともの、人と人の交流

テントで、私が何げなくおしゃべりをしながら、折鶴を折っていると、十歳前後の子どもたち（女の子が多かったのですが、男の子もいました）がとてもおもしろがりました。そして、「もう一つ折ってくれ」と何度もいいます。何羽も折っているうちに、「紙をちょうだい」といって、自分で一生懸命に折り始めました。けっして、「初めにどうするの？」などと聞いてきません。「もっとゆっくり折って」とも、「これでいい？」ともいいません。「教えてよ」といわないのもちろんです。いろいろやって見て、自分で、「これでできた」と思うときに、私のところに見せに来るのです。そして私が、「この鶴は疲れてるみたい」とか、「これは、遠くまでとびそうだ」とか、「きれいな」とか、こういうのを楽しそうに聞いています。

そして彼らは、「ひろ子が作ったので、自分も作った」と思っているのです。何羽も何羽も折ったあとで、子どもたちは「ほかに何か作れるか？」と聞いてきます。「こんどは違ったものを教えてよ」とはいいません。

こういうことは、私が、米國フィラデルフィア近郊やピッツバーグ市の中流家庭でベビー・シッティングをしながら折り紙をした時の体験とはずいぶん違って、興味深く

思いました。一九五九—六二年当時、Origami は今日ほど米国で普及はしていませんでしたが、アメリカの子どもは、私が二、三羽仕上げるか仕上げないうちに、“May I make a crane (swan)?”とか、“How do I fold this?”とか
“What do I do next?”とかいう子どもが多いようでした。私の折り進み方がちよつと早いと、“Do slowly please,”とか“Oh, you go too fast”といって、自分のペースに私を合わせようとしています。ヘヤーの子どもたちが、私の折り進み方のペースをあるがままにまかせているのとは対照的です。

さらに、ヘヤーの子どもたちは、折鶴をたくさん自分で折ってみて、その折り方をものにしたと思われるころ、はじめて、「ほかに何が作れる?」と次のものへの興味を示す場合が多いのですが、私の接したアメリカ人の子どもの中には、ヘヤータイプの着実型のほかに、自分で一羽か二羽折ると、すぐ“Can you make something else?”とか“Show me something else?”とか“I want to make a Christmas tree”などとい出す、せつち型や創造型の子どもたちがいました。(注一)

注一

この点、ヘヤーと米国中流の子どもたちの個人差の幅を比べると、アメリカの方が、このようなさまざまなタイプの反応を示し、ヘヤー・インディアンの子どもたちは一様な反応を示したように思います。

この差は、総人口三三〇人のヘヤーと、巨大な人口をもつ米国中流層という demographic な現象を要因としているでしょうが、なお、それよりも強く、両者の文化の構造上の問題から生ずるように思われます。つまり、ヘヤー式学習というのが、ヘヤー文化の構造上の強いかなめの一つであつて、ヘヤー文化をになう者のすべてに要請される life style であるのに対し、米国においては、“個人が目的達成への意欲を示すこと”は中流文化におけるかなめの一つとして大切であり、万人に要請されませんが、そのかなめも個人の personality をより強く行動に反映しうる程度のゆるいかなめだといえるかもしれないのです。

一口にいうと、アメリカ人の子どもは、ガヤガヤとおしゃべりしたり、質問を連発したりして、騒がしく、折り紙を覚えていきます。そして、子どもと私との交流の中で覚

えていくのです。しばらく時間をおいてその子どもに再会すると、折鶴の折り方そのものは忘れていたけれど、私が折鶴を教えたくれた人だということをよく覚えていたといった場合も少なからずあります。

ところが、ヘヤーの子どもたちが、折鶴を覚えるときには、その紙と子どもとの間に強い交流が存在するのであり、彼らは、私と紙との間にある交流（つまり私が折紙を折っている状況）を、自分で再現しているといえると思います。ですから、子どもと私の間の交流は彼らにとって、主観的には重要でないのです。

折り紙の例からもヘヤー・インディアンという「自分で覚えた」の内容が少しわかってきたようです。さらに例をさがしてみましよう。

ヘヤー・インディアンやその近隣のインディアンの子どもたちの中には、Inuvik というマッケンジー河口の町にある寄宿学校（一〇九年生）に行っている者がいます。そこには、カナダの北極海沿岸西部に住むエスキモーの子どもたちも来ています。そこで教えている先生の話では、手工にせよ、計算にせよ、エスキモーの子どもは、ちょっとやってみて、下手でも間違っていない、その結果を先生の

ところに持って来て、「これでどうですか？」ときくそうです。先生は、それを見て、「よろしい」とか、「次にはここに気をつけなさい」といってあげます。そして、そのときの励ましが影響して、エスキモーの子どもははりきって覚える者が多く、一般に進度が早いということです。

ところがインディアンの子ども、中でもヘヤーの子どもは、先生が「どう、できは？」と聞くと、にたつと笑うだけで、自分で納得するまでは先生のところに計算の紙や、手工の作品を見せに行きません。しかし、一たん持ってきたときにはかなりよくできているし、手工などでは傑作がよくあるとのこと。しかし、大勢のクラスの中では、教材の進み工合はエスキモーにおくられてしまい、とりのこされがちだということでした。

つまり、白人の先生にとって、エスキモーは教えやすく、ヘヤー・インディアンは教えにくいというのです。逆にいうと、「学校」というシステムの中で、エスキモーの子どもたちは、「教える」という役割をもった先生を使いこなす、（注2）ヘヤーの子どもたちは、それができなかったといえます。

注2

だからといって、これらのエスキモーの土着文化の中に「教える」「教えられる」という概念があったというふうに結びつけてよいかどうかを、私はまだ知りません。エスキモーが白人の学校システムに適応しやすいような他の文化的要因に引きずられて、このような現象が起きているかもしれないからです。たとえば、かりに「私は今、これをしているのだ」ということを自分のまわりにいる他の個人に見せることが満足の源になっているのであれば、「教えていただく」という気持ちがなくて、先生と生徒との教場（特に寄宿学校）での「期待される」interaction が成立するからです。

白人社会との接触に際して、この地方では、エスキモーの方が早く機械をこなすようになっていくといわれますが、この現象には、Inuvik の先生の観察に見られるような両者の差が要因となっているかもしれません。

つまり、折り鶴や食卓の並べ方といったものは、「自分で覚える」ヘヤー方式で見事に習得されるのですが、無電装置の操作や修理、飛行機の整備、美容師の技術、看護

婦としての技術など（これらは、一九六〇年代にカナダ政府が、エスキモーやインディアンの若者に教えようとしていた技術です）は、教師に、一定の教課程をふんで教えてもらう方式の方が、能率的だからです。

ヘヤー・インディアンは機械いじりそのものがきらいなものではありません。ただ、その使い方を覚えるときの覚え方の好みが強いです。もちろん、一九五〇年以降の学校教育の普及が、ますます進むにつれて、ヘヤー・インディアンの学習に対する態度は多少変化するかもしれないのですが。

3 日本をふり返って

以上のように、ヘヤー・インディアンの社会では、「自分で覚える」ということが強調され、子どもも大人も、「覚える」ことに関して自分のペースで対象に肉迫していきます。ここに、私どもは、狩猟採集文化に適合した教育システムの一例を見できました。しかしヘヤー社会もカナダ文明の一部として狩猟採集文化以外の文化形態をうけ入れざるを得ない時代に入っています。そこで、彼らも、ある程度、「順序だてて、人に教えてもらう」ことにより能率的

(?)にものごとを覚えるという態度を身につけねばならなくなっていくでしょう。そうしなければ、白人社会により早く適応していく(人種差別をうけながらですが) エスキモーをはたで見ながら、よりみじめな境遇にうちのめされるかもしれない。

こういう状態にあるヘヤー・インディアンの将来を考えていくと長くなります。それはさておき、一九六〇年代の初期に私が接した「自分で覚える」ヘヤー・インディアンの個人々々が、大人も子どもも、それぞれ、自信にみち、生き生きとしていたことが忘れられません。彼らは、自身で主体的にまわりの世界と接し、自分の世界を自分で築く喜びを知っている人間の美しさをもっていました。

日本に帰って来て、まわりを見まわしたとき、子どもも、青年も、「教えられること」に忙しすぎるのではないかと、思うようになりました。もちろん、はじめに述べたように、私たちが住んでいる現代日本の文明社会においては、一定のカリキュラムにもとづいた教育が必要であることは認めます。しかし自分の心に浮かぶ好奇心を自分のペースで追

求していくためのひまがない子どもが多いことは、悲しいことだと思えます。

日本でも職人の世界では、「自分で覚える」ということを大事にしていたようです。しかし、現代ではこういう修業に耐える若者が少なくなって来ているということも、おもしろい現象だと思えます。

さらに、中卒で就職した若者たちの中に「自分の生きがい」をつかんでいる者があるのに対し、高校や大学に在学している男女に人生の空しさを感じている者が多いということも、「教えられ」過剰の現象と関係しているかもしれない。

幼時に「自分で覚える喜び」を深く体験している子どもだったら、中学や高校のカリキュラムに押されそうになる生活の中にあっても、自分の世界を築く自信を失わない代を過ごし得るのではないのでしょうか。

そのためには、「よく観て」、「自分でやってみる」という時間が必要です。そして大人の側に、それを待つやるゆとりが必要であるように思われます。(おわり)